

「手習い」イギリス文化論

第10回

～イスラム体験～

北海道大学創成科学共同研究機構
明治乳業「乳の価値創造研究」寄附 研究部門 博士研究員

小林 国之

イギリス生活が始まってしばらくの間、ホームステイをしながら、朝八時過ぎから夕方三時過ぎまでエクセター大学にある語学学校に通い、その後研究室に顔を出す、という生活をしてきた。

ホームステイは、週二万円ほどの料金で朝食、夕食を食べさせてくれる。初めて訪れた国の風習や文化に馴染むためにもってこいの方法である。とまどうことも多かったが、今にして思えばとても貴重な経験であった。最初に誰もが共通して困惑することは「ホームステイ」という暖かみのある言葉が想起させる家庭的印象との、ちよつとしたギャップである。エクセター大学の語学学校には、毎年日本の大学から約三十名の短期語学留学生が来る。彼らよりわずかばかりイギリス滞在歴の長かった私は、そのお世話役のようなものをやらせてもらっていたが、学生たちの多くは、滞在開始一週間ほどたつと、自分たちのホストファミリーへの不満（というよりもむしろ自分たちの先入観・期待との単なるギャップといった方が彼らには公平であろう）を口にし始める。洗濯物を洗ってくれない。家族だけで夕食をして、自分には冷凍ピザが用意されている。そうした学生たちに「ホームステイは彼らにとってビジネスだからね。」という私は、冷酷な人間に映ったに違いない。「それは冷たいということではない。節度を守った関係の上で、彼ら・彼

小林 国之(こばやし くにゆき) 氏



- 1975年 北海道に生まれる
- 2003年3月 北海道大学大学院農学研究科博士課程
後期課程修了(博士(農学))
その後、北海道大学大学院農学研究科
研究員を経て
- 2004年4月 日本学術振興会特別研究員(酪農学園
大学酪農学部所属)
- 2007年4月 北海道大学創成科学共同研究機構
明治乳業「乳の価値創造研究」
寄附 研究部門 博士研究員

◆主な著書

『農協と加工資本』～ジャガイモをめぐる攻防
(株)日本評論社 2005年

女らは、異国から訪れた我々に、とても親切にしてくれるんだ」ということを説明しても、ホームシックになりかけている彼女・彼らにとっては、あまり慰めにはなっていないことが多かった。確かにホストファミリーによっては、本当に冷たいところもある。ほとんど留守で一緒に過ごす時間をとってくれないところなどもあり、学生たちに同情せざるを得ない場合もある。しかし、一ヶ月ほどの留学を終えて、彼ら・彼女らが町を離れるときに、コーチステーションと呼ばれるバスターミナルまで朝早くに見送りに来てくれたホストファミリーと、時に涙を流して抱き合っている姿を見ると、深い温かい関係を築いてきたのだということがわかる。家族以外の人と初めて暮らした日々が、学生たちにもたらしたものは、決して語学力だけではないのであろう。

さて、達観したようなことを書き連ねているかという私も、ホームステイ当初は様々な困惑を抱えていた。語学留学の学生たちよりも若干大人の私は、その日々を意外と冷静に見ることができていたように思う。さて、今回書きたいことは、



ホームステイ先から大学へ向かう 途中

ホームステイそのものではない。一つ屋根の下、ホストファミリーという世界中から若者が集まってくる、手近な国際的空間のなかで、私を感じたこと、なかでも英語という世界共通語というツールを学ぶために集まってきた人々を通じて見えてきた、自分が今まで知らなかった世界についてである。一言で言えば、ヨーロッパ（イギリス）を中心とした世界像、もつといえはイスラム圏への接近である。

今回はいつもと趣向を変えて、滞在当初毎日書いていた日記の一部を紹介しながら、私がいかにイスラム文化に出会い、接近し、困惑してきたのかを紹介したい。なお（）内の言葉は今回加えたものであるが、それ以外はほぼ当時書いた原文である。多少読み苦しい点は、臨場感ということでご容赦いただければ幸いである。ではご覧頂こう。

◆ ◆ ◆
4月23日（土）

イギリス留学のまさに初日。一人の飛行機十一時間半はかなりつらい。一人の旅行者は意外というものと、今までは気がつかない発見。エクセターの駅に迎えにきてくれたホストファミリー（アンデイ）につれられて、丘の上の一軒家に。子供四人の代わりにイエメン人と、西洋人（翌日トルコ人と判

明)に迎えられる。日曜日のお父さんの大工仕事で作られたような机ではパソコンも打てないので、ベッドでいま書いています。窓からは町を見下ろすことができそうで、明日の朝が楽しみです。まずは時計を買わないと。

4月26日(火)

今日もイギリスの天気は雨。午後に一時晴れたが、すぐに大降り。帰途も降られたが、家の直前から上がり夕食後にはさすがにいい天気になる。今日、初めてイギリスのサンデーローストを食べる。食材はダック。鶏肉よりも高いらしいが、とてもうまい。アミン(前述のイエメン人)は、イスラムの儀式に乗っ取って処理された肉ではないといつて食べるのをやめる。ELC(エクセター大学の語学学校の略称)では、授業が開始された。自己紹介ばかりだったが、今後の困難が容易に予想される展開。世界中から集まってくる人々。それぞれの国では、地方自治体職員や公務員、会社社長の息子などが、ここでの肩書きは学生である。積極的に自分の意見を言わなければ、お金を払っている意味がない。若い頃のナイーブな自分にはできなかっただろうと思う。この年で来てよかったのかも。雨に打たれながらゴアテックスの裾から落ちるしずくを手でぬぐっていると、イギリスにいるという実感が少しわいてきた。

4月28日(木)

夕食後、皆でテレビを見ていたら、ひよんなことから刑務所の話になる。イエメンでは、窃盗罪は手首切りの刑。両手、両足も切られるという話になる。さらには銃殺刑があり、被害者の家族がそれを見守る。その話を聞いたリン(ホストマザー)は顔色を変えた。死刑制度のないイギリス。人間は間違いを起こす。もし冤罪で死刑になったらどうするのか、人を殺すことと死刑をすることは神の代わりをするようになる。人間は決してミスをしないう存在ではない。アミンは言葉の壁からか、リンが本気で困惑していることに気がついていない様子で、*"man kill the man, bad man killed"*。こんな内容のことをいつも通りの大きな声で笑いながら繰り返した。アンディは*"calm down, Lin"*といつて自分部屋に消えた。取り残された私とアミンとリン。同じことを繰り返すアミンに困惑の度合いを増した。ついに彼女は*"You upset me!!!!!"* *"Don't laugh!"* *"Don't upset me. this is my house!!!"*とこつて、血相を変えて部屋を飛び出していった。残されたアミンは呆然としている。何が起きたのか、自分が彼女を困惑させていたことに全く気がついていない。彼にも悪気はないのだと思うが、言葉の壁、習慣の壁が些細なことから大きな亀裂を生んだのであろう。明日からはどうなるの

か。関係の修復ははかられるのか。

ちなみに辞書で upset をひくと、狼狽する、心をかき乱す、むちゃくちゃにする、とある。リンは自分で「私は too kind, sensitive」といつていた。昨晩も、子供たちの食べている食事、野菜を食べずに添加物の入ったものばかり食べていることが心配で眠れなかったといっていた。そんなリンの心中は察してあまりある。

夕食はラム肉と野菜をゆでたものにブラウンアンドホワイトライス。アンディ曰く、自分は手料理に無縁、「ready to eat」出来合いの食品」が家庭の味だという。昨日みたテレビ番組の子供をみると、イギリスの健康、教育、様々な問題の根底に食事の問題があるのではと、誰もが思うであろう。

5月7日（土）

アミンが携帯電話を落とした。今週になってから、銀行カード、家の鍵に続きに第三弾らしい。動画も撮れる高性能。こちらで一四〇ポンドで購入したらしい。バスに乗っている間に落としたらしいのだが、本人は隣に座っていたやつが落としたのを持って行ったかと思っている。実際に携帯に電話をしてもスッチが切られている。アンディがバスのオフィスまで乗せていってくれて聞いてみたがなかった。携帯の契約書に緊急用の



庭で洗濯物を干す、長男のジョーダン

電話番号が書いてあるはずだからそれを見せて、とリンがいつてもアミンは「this man, takell」を繰り返すのみ。手助けしようにもない。明日になったらボーダフォンに電話するといっているが。

彼は今まで六回もホームステイ先を変えているらしい。イェメンではポリスオフィスの高官らしいが、謎の多い男である。国には家が四軒あるらしい。リンは彼のパスポートを盗み見て、彼がポリスマンであることを突き止めているらしく、事あるごとに彼の正体を探ろうとしている。そのたびに彼は武蔵丸のように言葉がわからない振り。それにしてもアミンもリンもいい勝負である。ホームステイは基本的にホストの家だからプライバシーはないものと考えなければならぬのか。実は人ごとではないと、ちよつとビビツたりして。

5月14日（土）

今日は一日雨。イギリスにはいろいろな雨を表す単語があるらしい。その中で覚えているもの。Scattered shower, drizzling, overcast, pouringrain, など。今日の雨はdrizzlingだろうか。そんな中、ダートムーア（以前にも紹介した国立公園）にバス旅行。昨日の夜中に具合が悪くなったせいか、いきなり酔う。久しぶりのバスということもあると思うが、ヘッジの中を、枝を

こすりながら進むバス、時には立ち往生してバックしたり何だり。かなり参った。ついたところはどこかわからないが、石でできた橋。見学もそこそこにカフェにてホットチョコプレート。その後、ウィッドコムという小さな観光の村に行き、そこでもコーヒー。その後、アジア、アラビア人は霧の中丘を登ったが、トルコ人たちはみんな車の中で待機していた。私もジアド（ELCのクラスメイト）と一緒に上る。

彼、リビア人なのだが、日本にも居そうなやんちゃなタイプ。それにしても中東系は金持ちの息子が多い。オイルマネーか。この前の授業でホームパーティーを開くとしたら何人ぐらい呼ぶか、という質問に、サウジアラビアの男性は「百人以上」。立派なゲストハウスがあるらしい。自分たちの地下からわいて出てくる石油が今の世界を動かしていることを認識しながら、それを先進国という自分たちが世界の中心のように振る舞っている国々に売っている。たぶん彼らは当然の権利としてオイルマネーを考えているのであろう。いったいどんな世界観をしているのか、興味がある。

5月17日（火）

朝食時にヨーグルトを食べる私にリンが、「それは今食べるの。」と聞いてきた。そうだよと答えると、「イギリス人は朝は

ヨーグルトは食べない、高いからね。シリアルとブレッドだけ。」そのあと、ミカンを持ってダイニングを出ようとする私に、「それは学校に持って行くのか。」と。ホームステイの料金には昼食代は含まれていないのよ、といわれる。ヨーグルトが高い、といったのはそういうことなのか、と思う。ホームステイはビジネスなのだ。契約違反は許されないのである。食後のティー、クッキー、果物は自由に食べていいといっているのに、たった一個のミカンを持ってでようとする僕に、それはだめだという。イギリス人の一面を垣間見たような気がして、すこし



アンディ 手作りの部屋の机

困惑した。一度期に四人も学生を受け入れていたのは、同時に多数を受け入れた方が、一人ずつよりも合計の食費等が安くすむためなのだ。その分、新しく買った家のローンに充てることができるからである。そう、まさにホストファミリーは内職の一環なのだ。

昼食後は、授業でプレゼンテーションのまねごとをやった。オマーン人のサイフが張り切っていた。彼は最終プレゼンテーション（講義の最後で行う試験）でトップを取る、とここ最近張り切っていた。発表中は異常に汗をかいていたらしい。デイビッド（語学学校の教師）が私のプレゼンはなかなかよかった、と最後にいったのを聞いて、きつとかれは気分を害しただろうと思う。そんなことないでしょう、と思うかもしれないが、彼らの向上心は強烈である。明治維新直後に欧米に渡った日本人や大学に進学した学生たちは、自分たちの学んでいることがそのままこの国の将来を左右する、という意識を当然のように持っていたと、司馬遼太郎が「坂の上の雲」で書いている。今の学生とはずん分と違う気概である。どちらがいい、ということはないと思うが、中東からの学生の一部をみると、そうした気概を持っているように思われる。また、彼らはある意味でエリートであり、国の政治、経済の中心にいる人々の子息が多い。当然親の跡を継いで国を左右する人物になると思ってい

るのであろう。

授業後に徐々にシヤヒン（私と初日から滞在することになったトルコ人）と帰る。最近授業内容がわからない、と怒っていた彼に、チューターに相談に行けばいい、とアドバイスしたのだが、今日早速行つたらしい。明日の朝にも少し詳しく話をするそうだが、ずいぶんと明るい顔になっていた。そんな彼にさらなる吉報が。ビザの申請をしていた奥さんの許可があり、急転直下今週の日曜日に娘さんとともに渡英するそう。家も決まっていらないのにどうするのか、といったら、二、三日はアソンの滞り滞りして、それまでに家を見つけてるのだぞうだ。家の中にもう一人の女性、リンが非常にいやがっている展開に短い期間だがなりそうである。彼女のストレスはますます増加するだろう。

6月7日（火）

大学からの帰路にセントトーマス近くの電気屋にわざわざ買い物に寄つたのに十七時半で閉店。ところで、リビアという国に関して、日本にしていると「未知の国」、「テロリストの国」、というアメリカのプロパガンダしか聞こえてこないが、どうやらイスラムの国、というよりも北アフリカでヨーロッパにかなり近い国のようだ。彼らもアラビア語が母国語だが、かなりな

まっているらしく、アラビックの人でもわからないらしい。クルスメイトのジアドをはじめ、彼らはテレビゲームにコココーラ、ピザ、たばこ、酒が好き。イスラムの中でもかなりルーズな様だ。同じくアラビア半島からみた遠方に位置するイスラムの国であるバングラデイツシュなどよりも戒律が緩いようだ。世界の見方が変わる。アメリカを経由してヨーロッパ、中東をみると、ヨーロッパからみるとではずいぶん印象が違うようだ。座標軸の轉移。

6月8日（水）

昨日から二日続けての晴れ。気温は結構低いが、すがすがしい天気。Peanut。掃除機のフィルターを買いまくシティーセンターをうろつくが見つからず（ヨドバシがないんだもの）。夕食は、スパイシーチキンとジャガイモ、肉じゃが風のもの。窓の外をふと見ると、熱気球、arachalloonというらしい。子供たちに教えたなら、反応が薄かった。子供つてつれないよね。長男のジョーダンだけが気を遣つてありがとう、つていつてくれしました。

ところで、リビア人は酒を飲んだらとまらない、あげくにはweed（マリファナのこと）も吸うぞ、とジアドがいつていた。この二日ほど、リビア人が興味深い。最近家に来たリビア人の

オマー。彼はほとんど英語がわからないらしい。今、庭で一人たばこを吸ってます。あれ、マリファナかしらん。夕日の中、熱気球が丘の向こうに消えていきます。すごくいい眺めなんだろうな。あつ、みえなくなつた。

6月14日（火）

今日は十八時半までELCにいと、管理人においだされた。家に帰ると今日もロシアとトルコの大騒ぎ。トルコ人の部屋にロシアの少女たちが出入りしていることに対してリンは何か



アンディとリン。新しく購入した家のワールドにおいているキャラバンのなかで

あつたら大変、と責任を感じているようだ。ロシアの少女は今日の夕食の美味しいラザニアも食べない。リビア人も夜九時半頃に帰ってきて、やはり何も食べていないようだ。知らない、言葉もあまり通じない、年齢も違う人間が一つ屋根の下に暮らしている、考えれば問題がない方がおかしいぐらい奇異な環境である。

6月18日（土）

曇り空のもと八時に目覚める。シャワーを浴びて下に降りるとリンがストーブを付けて新聞を読んでいた。ロンドンに行くカタリーナ（ロシア人の少女）を朝六時に送りにいこうとしたら、すでに出発したあとだったらしい。オマーは昨日の夜帰つてこなかったようだ。昼食はアンディがチーズたつぷりのオムレツを作ってくれた。なんか、こういうのはすごくひさしぶりな気がする。宿題を二時間ほどやっているトルコ人が一人でサッカーをしてきた、と聞いて帰宅。食後にひげを怪しく剃ってきて、「どう、いいか」と聞いてきた。みんな「いいよ、いいよ」といつていた。彼、二年前にもロンドンに留学していて、親は英語がしゃべれるらしい。またまた金持ちの子供だろう。ロンドンに近いうちにまた移りたいといっていた。

オマーは今夜も帰らないのだろうか。どうやら国からお金を

もらって留学しているらしく、学校に行っていないことが国にばれたらしい。大使館から呼び出しがかかって強制送還される可能性もあるらしい。時間とお金の無駄。やる気ない人を無理矢理つれてくることないのに。昨日は久々に弱い偏頭痛、今日は朝から背中が神経痛。一週間、疲れたのだろうか。

6月26日(日)

午後からは家に戻って、新聞を読んだり、昼寝をしたりして過ごす。それにしても、日中に眠くなるのはなんだろうか。夕食は、数日前もでた中華料理風の麺料理。ビーフンも試してみたいとリン。昼食は、はじめての自炊で卵炒めみたいなもの。夕食後も、外が気持ちよかったのでガーデンで紅茶を飲んで過ごす。そのうちオマーが帰ってきた。昨日の夜は一人でウォツカを二リットル飲んでシティーセンターのベンチで寝ていたらしい。帰ってきてからも部屋からボトルを持ってきて飲んでいった。酔っぱらってご機嫌の様子。一年間語学を勉強した後に、二年間のマスターコースをリバプールの大学で受けるそうだ。父親の経営する銀行を継ぐ予定らしい。

彼の家族は全員トヨタのランドクルーザーを持っていて、週末になるとみんなで動物の狩りに出かける。夜にサーチライトで照らし出されたウサギガゼルみたいなのをハンティングし

て、サハラ砂漠で肉を焼いて歌を歌うのだそうだ。満天の星空。全く想像がつかないが一度体験してみたい。なんかロマンティック(アラビアのロレンスか)。一キロ先のウサギも一発だけ、と自慢していたが、リンが聞いたらどう思うかしら。中東、北アフリカ、一度いつてみたい。少し彼と話してみたが、決して悪いやつじゃない。明日から語学学校を変える、といていた。「もう酒は飲まない、勉強だ、勉強だ」といいながらウォツカの瓶をぐびぐびと。イスラム、前にも一度思ったが、彼らはきつと酒がものすごく強い人たちで、それを知っていたアラアが、このままではアラビア人は酒で身を滅ぼすと思い、禁酒したに違いない。こんなに酒好きな人々を酒から遠ざけておく信仰心、戒律を守らなければならない、という空気。これこそがまさに宗教なのだ、妙に感心した。

来週にもう一人のリビア人が家に来るので俺は出て行かないといけない(家には語学の関係で基本的には同じ国から二人以上は受け入れない。このあたりのコーディーネートは語学学校がおこなっている)。「家を探さないと」と新聞を見て探している姿に、何だが同情した。私も人がいい。

6月28日(火)

食後、オマーが買ってきたバドワイザーを二人で飲む。夜に、



長女ローレンと三男のタイラー。休日の1コマ

彼が香木をもってきた。立ち上る煙に鳴り出す警報機。おどろいておりにくるアンデイ。におい的には嫌いじゃない、が、アンデイにしてみればいったい何してくれてんのよ、という感じだろう。オマー、明日から一泊でロンドンに行ってくるらしい。とても厳しいお父さんがロンドンの銀行にお金を振り込んでく

れるのでそれを引き落としに行くといっていた。どこでも引き落とせると思うが、何か秘密があるようだ。彼のお父さん、三年間リビアには帰ってくるなよ、と釘を刺しているらしい。でも彼、チュニジア人の彼女に三ヶ月後にイギリスにくるようにいっいたらしい。で、彼女も来るらしい。親の心子知らず。オマーの所行、父親知らずである。

7月1日（金）

帰宅後に、アンデイの妹の家に、私が購入予定の車を見に行く。途中ジェームスオーウェンで新しいトルコ人の生徒をひろうといわれた。ついてみたら、待っていたのはムラット、ELCで同じクラスだった。驚いたが、なかなかいいやつなのでおもしろくなりそう。彼はトルコの地方役人、二十五歳。十月上旬まで滞在する予定らしい。

車を見に行ったら、なかなかいい車。室内はちよつと汚かったが、子供も乗っていたということではしょうがない。タイヤは新しく、MOTも十ヶ月ある。税金は十月らしいが、七万マイル。問題ないだろう。銀色でシーディーチェーンジャーについて、サンルーフも。車内に忘れたリュックサックを夜に持ってきてくれた彼。車を手放すので最後のドライブ、ということできたらしい。彼は子供ができたので大きな車（三菱ス

ペースギア?)に乗り換えたが、この車に愛着があるらしい。車を手放すときには声をかけて、といていた。それだけ愛されていた車だから、きつと大丈夫だろう、と期待を込めて。

ところでムラットはイギリスの料理が全くだめらしい。肉が食べられなくて、野菜と魚のみ。ちよつとトラブルの予感もする。あと、ムハマド(前述のオマーの後にやってきたリビア人である)、彼、実は酒好き、盛り場好きの十七歳。こちらも困ったちゃんの香りである。昨日は家族の手前、酒嫌いだ、と嘘をついていたらしい。まず、嘘をつく時点で問題でしょ。夜十時頃、三人で家の周りを散策。ムハマドの英語に我々二人の英語が崩されそうである。夕食はeggplantのラザニア。おいしかった。

7月4日(月)

学校のない初日(先週で語学学校は終了)。今日は誰も部屋にいなかったたので、一日中一人。大学の食堂も閉まっているよななので、明日も昼食を買っていかないと。麓のお店で一・九九ポンドのサンドイッチ。ムラットが夕食後に外に買い物に行つて帰ってきてから、二時間ほど話をする。いい勉強になる。彼の職業はデイストリクトガバナー(地方の知事か長官のような職か)。七千人の受験者のなかから試験、面接を経て選ばれ

るのは五十人。一年間の海外研修を含む三年間の研修期間を経て、地方に派遣されたときには、家と運転手付きの車が用意されているらしい。ドイツに五人、フランスに五人、残りはイギリスに来ていろいろらしい。イスラエルとの関係や、アメリカに対する考えなど、いろいろな話をする。ユーラシア大陸の端っこからみているのとは違いずいぶんと視野が広がる。トルコ、一度いつてみたい。コココーラとペプシがともにユダヤ人の会社だということなどの話。週末のLive8の余波がテレビなどでいろいろ見られている。週末にはG8がある。それへの抗議としてエディンバラに人々が集まつて警察といざこざを起こしていた。

7月6日(水)

夕食のチキンローストを食べた後にムラットからイスラムの講義を受ける。イスラム教はすべて来世のために生きるのだ。イスラム教が、ユダヤ、キリスト教ときて最後にできた宗教だから、一番いいんだ、という素朴な理論。でもだからこそ前の二つの宗教の存在を認めることができる、という度量。

7月7日(木)

昨日少し早く寝たせいとか、今日は体調がよかつた。午前中か



左・サウジアラビアのアジズと右・リビアのジアド。ダートムーアへのバス旅行で立ち寄った古城にて

からお昼過ぎまで、順調に読書。ついに論文一つ読んだ。昼に買ったインスタントコーヒーを飲んでいたら、とも（日本人のスポーツ科学を勉強している大学院生）から電話。夕食は鯖をたべた。美味しかったが、ご飯がほしくなった。ロンドンで爆破テロ。四十人近くの死者が出ているらしい。イスラム教徒の同居人たちはテロリズムスリムという構図に嫌気がさしているらしい。そりやそうだが。アメリカのテロもユダヤ人の仕業だと思っているらしい。9/11にかぎって世界貿易センタービルに勤務しているユダヤ人が全員休んだ、ということはイスラムの世界ではよく知られているらしい。

以上、日記からイスラムに関わる人たちが登場する場面だけを拾い集めてみた。改めて読み直してみると、結構中身の濃い日々を送っていたものだ和我ながら感心する。残念ながら、私の北アフリカ、トルコ旅行の願いは果たされなかった。アラビアのロレンスになるのは、まだ先の楽しみにとっておこう。あつて世界を支配した大英帝国で出会った彼らは、今も私に強烈な印象を残し、世界の見方を少しだけ変えてくれたのだ。